

天使の現実

岡元真弓

先日、結婚して三十年目を迎えた。結婚とは、環境の違う他人同士が、ある日から一緒に暮らすことである。思えばお互い「ああ言えばこう言う」の関係を保ち間違って来たものだ。

結婚という「寿退社」していった知的障害のN子のことを時々思い出す。

N子は、町の名士であった祖父のせいで障害の認定を受けられず、小中学校とも普通学級で過ごした。卒業後は工場に勤めたが、仕事が出来ず辞めさせられた。

初めて会社に来てもらった時、丸っこい体と人懐っこい表情に、たちまち惹きつけられた。下がるメガネを何度も指で上げながら、無邪気に喋りまくる。父親は思いっきり目尻を下げて見つめるだけ。誰もがN子に「無条件降伏」していた。

N子の天使のような笑顔と、それに反比例する仕事振りに、私たちはいつも悩まされていた。振り上げた拳を何度そっと下ろしたことが。

仕事はたと紙（着物を包む和紙）の紐つけであったが、目標の八〇枚を達成することは多くはなかった。たまに目標を達成すると、連絡ノ-

トに父親は「今日は八〇枚を超えたので、N子の好物のしゃぶしゃぶを夕食に作ってやりました」と綴ってきた。その後も八〇枚を超えると「今日は褒美にステーキを食べにきました」などと書かれ、文字が嬉しさに躍っていた。「ご馳走」の効果もたびたびでは意味ないのに、両親は止めようとはしなかった。

そんなこともあってか、好調時のN子の体形はますます丸みを帯びてきたのである。

そんなN子がある日「副社長、今度私結婚するんだよ」と照れながら言った。びっくりすると同時に、「相手はどんな人なのか」「その人の本当の狙いは何なのか」とつい疑ってしまっ

た。ところが、相手は大変好感の持てる人で、足に障害があった。遠い親戚であるN子の家に入入りしているうちに、N子の気立ての良さに結婚を強く願ったという。

結婚式場でN子の内掛け姿を目にしたとき、私は娘を嫁にやるような心境であった。お色直しにはウエディングドレス姿で新郎の腕を取り、嬉しさいっぱいの顔で現れた。思わず胸が詰ま

った。通勤できないため結婚を機にN子は退社していった。嬉しくも辛い別れであった。

しかし実際は、N子の生活能力が心配であった。掃除洗濯に料理や整理など、果たして出来るのか。到底出来るとは思えなかった。

彼女から電話がかかってきた。「料理とかどうしてるの」と訊くと、「だんなさんが何でもやってくれますよ。仕事から帰ってくるとね、だんなさんがご飯を作ってくれるよ」そして「子供が出来なくて困っているんだよ」ときた！

驚いた。正直言って子供を作ろうとしていることは知らなかった。もちろん子供を作ってはいけないということはない。私の中では、作らないのだろうという思いが刷り込まれていた。夫や両親の手助けで育てることは可能だろうが、ずっと子供に責任を持てるのだろうか。人権面から言えば当然子供を持てる。しかしまだ支援するための社会基盤が出来ていない。

無邪気なN子のお母さん姿も見てみたい気もするが、やはり現実には厳しいのだろうと、想像を打ち消した。またN子の声が聞きたいと思った。

岡元真弓（おかもと・まゆみ）プロフィール

（株）きものブレイン 取締役副社長。夫と共に脱サラし、創業。呉服販売業、レストラン業などを経て、現在はきものアフターケア、ガード加工、仕立てなどのきもの総合加工事業と、きものリサイクル事業の運営に携わっている。社内では財務、人事、広報などを担当。採用から人材教育まで、「自己流心理学」を用いたカウンセリングが人気。特に障害者の意識啓発と雇用管理に情熱を注ぐ。（社）全国重度障害者雇用事業所協会理事。新潟県十日町市在住。